

地域文化を活用した学びの場の可能性 — 共同温泉での造形ワークショップにおける 子どもの豊かな育ちと教員養成・保育者養成の実践的学び —

田 中 美 貴

The Potential of Learning Spaces Utilizing Local Culture:
Fostering Children's Development and Practical Training for
Teachers and Childcare Providers through an Art Workshop
at a Community Hot Spring

TANAKA Miki

【要 旨】

小学校教員・保育者養成校における学生の研究会活動¹⁾の一環として、地域文化の一つである共同温泉の中庭で学生による子どもの造形ワークショップを実施した。これにより子どもの豊かな育ちのための造形表現活動の場を提供するとともに、教員・保育者を目指す学生の実践的な学びの場とした。実施後、参加者アンケートをもとに子どもや学生の学び、またワークショップを行う「場」の意義や可能性について検証・分析した。結果として、共同温泉という場で子どもや学生が地域文化に自然に関わることによって、造形活動を超えた文化的学びの場となった。参加の保護者においても造形表現活動を通じた子どもの姿に触れることで子ども理解が深まり、学生も保護者の子どもや子育てへの思いを知ることができた。さらに、共同温泉という開かれた公共空間で造形活動を行うことによって、子どもと学生、保護者の関わりだけでなく、入浴に訪れた地域住民や観光客との文化的な世代間交流をもたらした。

【キーワード】

子どもの造形ワークショップ、造形表現、地域文化、教員養成、保育者養成

1. はじめに

本稿は小学校教員・保育者養成校における学生の研究会活動の一環として、地域文化の一つ

である共同温泉の中庭で学生による子どもの造形ワークショップを実施し、参加者アンケートをもとに子どもや学生の学び、またワークショップを行う「場」の意義や可能性について検証・分析したものである。

筆者は大分県別府市にある教員・保育者養成校に着任時より、そこかしこから湧き上がる温泉の蒸気に大地のエネルギーを感じ、この土地の文化や特性を活かした「子ども」「学生」「アート」をつなぐ、地域色のある土着的な研究ができないかと模索してきた。そこで、地域文化の一つである共同温泉という地域コミュニティにおいてワークショップを実施することで、子どもとその保護者、学生、そして地域にどのような影響を及ぼすのかについてワークショップの実施とアンケートをもとに検証を試みた。

このワークショップから子どもの造形表現に関わる豊かな育ちとその保護者に対する関わりや支援、学生の実践的な学びについて考察しつつ、ワークショップを地域に根付いた公共施設である共同温泉で実施することによって生まれるアートの広がり、一つのワークショップがもつ場の可能性を探りたい。

2. 地域文化としての共同温泉

大分県別府市は豊富な温泉に恵まれ、温源数・湧出量ともに日本一の規模を誇る温泉地であり、市営温泉をはじめ、地域が共同で管理している温泉浴場が数多くある²⁾。多くの温泉浴場の二階は公民館や集会室となっており、地域コミュニティの中心としても重要な拠点となっていることがうかがえる。少子高齢化が進む昨今、共同浴場の利用者数が減少傾向にあり子どもや若者の共同浴場離れが進んでいることが懸念されている。中山(2016)は共同温泉の利用実態について調査しており、温泉を管理する管理組織組合員の高齢化も深刻であると捉えている³⁾。

そこで、貴重な有限資源である温泉をいかに守り、次世代に引き継ぐかについての議論がなされている。それらの計画をまとめたものとして、令和5年7月に立ち上げられた別府市温泉マネジメント計画策定検討委員会による「別府市温泉マネジメント計画(令和6年3月)」⁴⁾がある。その中で「利用者が限定的(組合員のみ

で若者や観光客等の利用が少ない)」等、高齢者の利用者層が厚いという偏りが見られ、現状と課題の一つに若年層の利用が進まないことなどが挙げられている。その中で「学生等については、共同温泉等に関わる機会が少ないだけで、きっかけさえあれば十分に関心をもって利用や運営に関与する可能性がある」とも言われている。

造形表現活動による子どもの豊かな育ちや学生の学びとともに、地域の子どもの学生たちが地域への理解を深め、地域文化としての共同温泉が地域の宝であることを知り、地域とのつながりや愛着を育むことも目的の一つとして本ワークショップを企画・実施した。

3. 地域における子どもの豊かな育ちと学生の実践的な学びの場の可能性

(1) 共同温泉を「場」とする意義

一般的にアートワークショップが行われる「場」としては、下記の施設等が考えられる。

- ・美術館や博物館のアトリエ、ワークショップ室において
- ・アーティストや学芸員が「出張」する形で学校や教育機関において
- ・地域のアートスペースや公民館、コミュニティセンターにおいて
- ・公共空間や公園等の屋外の自然環境において
- ・企業による文化的プロモーションとして企業内、又は企業が設定した場所において 他

今回ワークショップを実施する共同温泉不老泉の会場は、上記の中では「地域のアートスペースや公民館、コミュニティセンター」に含まれるが、1階が共同温泉という性質上、地域住民が毎日、又は定期的に通う場所とされているのが通常の公民館やコミュニティセンターとの相違点である。また、共同温泉は地域に根ざした施設であるとともに、観光客もしばしば訪れるという、公民館やコミュニティセンターとしてはあまりない、稀な環境であることが想像できる。地域住民の生活の一部である場所、観光を楽しむ場所としての利用頻度が高い「場」

においてワークショップを行うことで、偶然居合わせた温泉利用者の視界に入る状況を作り出すことができ、子どもや学生の様子を自然な形で眺めてもらうことで、教育や保育、アートを感じてもらうきっかけになるのではないかと想定した。特に今回の会場に設定した不老泉中庭は、別府駅まで徒歩5分ほどという立地で、周辺に飲食店やホテルがあり、地域住民だけでなく観光客の利用や人通りも多い。通りに面した壁面の高さも低く、通行人からも中庭での活動の様子が目に入る環境である。学生、子ども、家庭、地域、そしてアートの関係を自然な形で結びつけられるよう、本実践を通してワークショップを行う場の意義についても探りたい。

(2) 子どもの非日常体験としてのワークショップ

参加する1歳児～8歳児の子どもは、共同温泉「不老泉」の中庭にて、学生の見守りや援助を受けながら、ハケやローラーを使って大きな造形紙に絵の具の塗りたくり遊びを体験する。参加する子どもの保育所・認定こども園・幼稚園の保育や、小学校の授業の中ではあまり体験できない非日常的でダイナミックな活動を設定した。紙いっぱいには繰り返し絵の具を塗り込め、屋外でのびのびと、純粹に絵の具の色や感触を楽しむ活動を学生とともに提案した。

子どもはすぐそばに寄り添う保護者や学生、会場を通りすぎる地域住民や観光客に見守られながら、開放的な空間で色や形に関わり、自分より大きな紙に描画や着色を楽しむ非日常体験として記憶に刻まれることが推測された。

(3) 学生の地域プロジェクトへの参加

別府市HPによると、別府市の文化活動の中に「混浴温泉世界実行委員会事業」があり⁵⁾、それらの事務局をNPO法人BEPPU PROJECT(以下BP)が担っている。BPとは、大分県別府市を活動拠点とするアートNPOである。同法人HPによると2005年に発足し、現代芸術の紹介や普及、フェスティバルの開催や地域性を活かした企画の立案、人材育成、地域情

報の発信や商品開発、ハード整備など、さまざまな事業を通じてアートがもつ可能性の普遍化を目指し、アートを活用した魅力ある地域づくりに取り組んでいる⁶⁾。今回のワークショップは、BPが2010年度より企画・実施している市民文化祭「ベップ・アート・マンス」(以下アートマンス)に研究会として参加登録し、体験型プログラムの一つとして実施した。

田代(2017)は地域指向型アートプロジェクトの比較分析の中でアートマンスについても取り上げ、持続的な地域経済社会の活性化に向けて、創作活動がどのような役割を担えるのか注目している⁷⁾。

但馬(2022)は非営利法人組織が地域における持続的な活動を通して市民の自律性を育てる原動力としての役割を担う実態に着目し、BPの取り組みについて事例研究対象として調査している⁸⁾。そこでも取り上げられているように、BPはアートマンス以外にも現代美術等に関わる企画を多岐にわたって実施しており、別府市が温泉とアートのまちとして周知されることに貢献している。

このような地域のプロジェクトに教員・保育者を目指す学生が参加することで、学びの場である地域の特色や風土、文化について知る機会としてほしいという期待もある。また、アートマンスの広報を通して、学生の活動を地域に発信する目的もあった。ほとんどの参加学生は別府市・大分市を主として、その他県内地域から通学しており、将来的にも多くの学生が大分県内への就職を希望していることから、学生にとっては地域に対する理解を深め、将来の教員・保育者として地域に密着した保育・教育を学ぶ機会となるよう、アートマンスのプログラムの一つとして本ワークショップを企画した。

(4) 保護者の子ども理解や地域の子育て支援としての造形ワークショップ

別府市は観光地ということもあり、毎週末のように市内各所でイベントが企画・実施されており、休日に親子で楽しめる場が多分に用意されている。今回企画した造形ワークショップも

その一つとして、アートマンスという地域プロジェクトに参加することを通して、休日に親子で楽しむ文化的なイベントとして、遊びの広場として利用してほしい思いがあった。ワークショップを通して親子の触れ合いや学生との関わりが生まれ、保護者は造形表現活動に取り組み子どもの姿に触れることで、日常では見ることができない子どもの興味関心や新しい一面を知ることができ、保護者の子ども理解が深まることが予想される。

幼児期に造形的な活動に触れることの大切さや、アートの重要性、子どもの表現についても保護者に間近に感じてほしいねらいもある。

学生にとっても保護者と関わることで、保護者の子どもや子育てへの思いを知る機会となるのではないかと。

(5) アートや文化的な取り組みを受け入れる地域性—地域住民や観光客が日常の中で子どもや学生の姿に居合わせる—

先述したように、別府市ではBPによるアーティストを招聘してのアートワークや、アートイベントが盛んに行われている。それは地域住民だけでなく、観光客をも巻き込んだ、又は観光客にも積極的に参加してもらうことを望んで企画されたものである。観光客はそれを目的として、あるいは偶然出会うこととなった旅の楽しみの一つとして自然な形でアートに触れ、参加することができる。地域住民や飲食店や小売店を営む事業主も柔軟に受け入れ、まち全体を盛り上げようとしている様子が伺える。観光地としての「おもてなし」の一つであろうか。別府市は多様性に満ちた地域であると考えられる。

今回会場として設定した不老泉中庭は、地域に開かれた開放的な場であり、参加者以外も活動を観覧することができ、子どもや学生の表現活動に興味をもってもらうことができる。今回のワークショップが、子どもや学生の学びの場だけでなく、地域住民や観光客が共同温泉に入浴するという「ついで」に、子どものアートワークに触れることは、別府の地域性を活かした世代間交流となり、子どもやアートを取り

巻く新しいつながりの場になるのではないかと期待している。

4. 方法

(1) ワークショップの目的と概要

1) 目的

- ・子どもの豊かな育ちのための造形表現活動の場を提供するとともに、教員・保育者を目指す学生の実践的な学びの場とする。
- ・親子で楽しむ造形活動を提供し、保護者が造形表現活動を通じた子どもの姿に触れる。そこに学生も関わり、保護者とコミュニケーションをとることで子どもや子育てへの思いを知る。
- ・共同温泉という場で子どもや学生が地域文化に自然に関わることによって、造形活動を超えた文化的学びの場を目指す。
- ・共同温泉という公共空間で造形活動を行うことによって、子どもと学生、保護者の関わりだけでなく、不老泉に入浴に訪れた地域住民や観光客との文化的な世代間交流を促す。
- ・ワークショップ実施後に参加者にアンケート調査を行い、その結果をもとに共同温泉におけるワークショップの有効性を検証・分析する。

2) 概要

- ・日時：2024年10月27日（日）第1回10：00～11：15、第2回12：30～13：45
- ・会場：別府市営共同温泉「不老泉」（図1）
- ・参加者：別府大学短期大学部初等教育科造形研究会1年生及び2年生計18名、参加を希望する保護者とその子ども（1歳～8歳）、1回につき上限15名

別府市営共同温泉「不老泉」の中庭において、造形紙に絵の具の塗りたくり遊びをすることが主な活動である。およそ10×12mの中庭いっぱいブルーシートを敷き、1.5×4.5mの造形紙を準備した。参加者の子どもは保護者や学生の見守りを受けながら、ハケやローラーを

使ってダイナミックに着色していった(図2)。

支持体としての造形紙はポリエチレン100%のボックス紙(布のような特殊造形紙)を使用した。ボックス紙には事前に学生が半透明の養生テープでメッセージを貼り付けており、着色して乾燥した後、子どもたちとともにテープをはぎ取り、マスキング技法によりメッセージを浮かび上がらせた(図3)。



図1 誰もが観覧できる会場(不老泉中庭)



図2 ダイナミックに着色する



図3 着色後テープをはがす

不老泉に展示することを想定して、メッセージは学生が活動のコンセプトと場にふさわしいものを自分たちなりに考え「おんせん×あーと

=ぼっかぽか」とした。1回目に「おんせん×あーと」、2回目に「=ぼっかぽか」を制作した。絵の具を乾燥させている間は、学生が準備したボックス紙と割り箸を使用した20×30cmの旗に、同じ絵の具を使用して子ども一人ひとりがオリジナル旗作りを楽しんだ。手洗いや足洗いのためのタライには不老泉より温泉をいただき、温泉の温かさや感触に触れられるようにした(図4)。作品は、実施日からアトマンズ終了までの約2週間、2枚を並べて不老泉中庭の壁面に展示された(図5)。



図4 洗い場で温泉に触れる



図5 完成し展示した作品

(2) 調査の対象

1) 初等教育科造形研究会の学生

調査対象となる学生は2023年度、2024年度入学の初等教育科1年生及び2年生計18名で構成される造形研究会に所属する学生である。今回のワークショップにおいては子どもの活動の環境構成や援助を担当する。所属する学生は造形表現活動に興味があり、教材研究を踏まえた子どもの造形活動に関する学びを深めたいと任意で入会した学生である。学生の希望により進路状況は若干異なるが、小学校教諭二種免許状、幼稚園教諭二種免許状、保育士資格の3つ又は

2つの免許・資格の取得を目指している学生である。

1年生の状況としては、研究会で企画した子育て支援事業における子ども対象の造形ワークショップを初めて経験したところである。

2年生の状況としては教育実習や保育実習を経て、保育士、幼稚園教諭、及び小学校教員の夢に向かって学ぶべき内容や目指す方向性が具体化し、現実味を帯びてくる時期である。また、学びを深めてきた学生にとっては、理論（授業）と実践（実習）の往還により、教育・保育の実践力が実感できる時期でもある。1年次からの研究会活動において、年に数回子どもの造形ワークショップの経験がある¹⁾。

2) ワークショップに参加した子どもとその保護者

筆者が2024年10月現在所属している大学の系列園協力のもと、保護者にフライヤーを配付して参加を希望した保護者（親子）と、アートのポスターやチラシ、HP、又は知り合い伝手に情報を得て参加を希望した親子である。申し込みの時点で、子どもの造形活動やワークショップに興味関心をもっていることが推察される。結果、19世帯、1歳～8歳までの子ども29名（1歳2名、2歳3名、3歳5名、4歳8名、5歳1名、6歳7名、7歳2名、8歳1名）の申し込みがあり、定員を概ね満たした時点で締め切った。1世帯あたりの子どもの数は1名、又は2名であった（実施前日、2024年10月26日時点）。当日は体調不良等のキャンセルもあり、参加の子どもは1回目13名（2歳3名、3歳2名、4歳4名、6歳3名、7歳1名）、2回目12名（1歳3名、3歳3名、4歳1名、6歳3名、7歳1名、8歳1名）計25名であった。

(3) 調査の方法

ワークショップに参加した初等教育科造形研究会の学生と、子どもの保護者を対象にアンケート調査を行った。アンケートの回答方法については学生、参加者、いずれも Google

フォームによる。QRコードにて示し、入力されたものを回収した。

倫理的配慮

本研究は、別府大学・別府大学短期大学部研究倫理審査委員会の承認（受付番号2024-9）を経て実施された。調査にあたり参加する子どもの保護者や学生に、研究の目的や個人情報保護について口頭及び書面にて説明し、記録写真及びアンケート結果を研究に使用することについて同意を得た上で実施した。アンケートの結果については個人が特定されることはなく、不利益は一切生じないことを説明した上で調査及びデータ公開への同意を得た。

5. 学生アンケートの結果と考察

造形研究会に所属する学生18名中、全員から回答が得られた。学生アンケートの内容とともに、項目ごとに結果と考察を述べる。

(1) 造形研究会への入会動機

造形研究会で学びたいと思ったきっかけや理由については、以下の項目に「その他」の項目を加えた複数回答形式で調査した。その中で当てはまる項目として最も多かった回答は「もともと絵や工作などの造形活動に興味があったから」が61.1%であり、ついで「楽しく学べそうだったから」が38.9%、「実習以外でも子どもと関わることができると思ったから」と「友達に誘われたから」が33.3%であった。その他「実習で役に立つと思ったから」が27.8%、「子どもに絵や工作を教えられようになりたいと思ったから」が16.7%、「美術造形に関する経験を積みたいと思ったから」が11.1%、「特技が欲しいと思ったから」が5.6%となった。「どこかの研究会に入りたい」と思い、消去法で決めたから」「その他」の回答はなかった。もともと造形活動に興味関心があり、授業以外での子どもとの関わりを期待して入会した学生が多いことがわかった。

(2) 地域文化（共同温泉）への関心

アートマンスの取り組みについて以前から知っていたかを問うと「参加して初めて知った」という学生が94.4%で、「以前から知っていた」という学生が5.6%で知らなかった学生がほとんどであり、地域のプロジェクトや行事にあまり関わる経験がなかったことがわかる。

ワークショップを行う前から不老泉を知っていたかの問いに対しては「知らなかった」が77.8%、「来たことがあるので知っていた」が16.7%、「来たことはないが知っていた」が5.6%で、「よく来ているので知っていた」という回答はなかった。

ワークショップで不老泉に来た感想については複数回答形式で「普段なかなか来ないがワークショップがあるので来た」と「温泉に入りたくなった」が38.9%と最も多く、「不老泉にまた来てみたいと思った」が33.3%、「ワークショップの場所は特に気にしていなかった」と、その他の項目で「色んな人に不老泉に来て欲しいなと思った」が5.6%となった。

今までに不老泉を含む県内地域の共同温泉（いわゆるジモ泉）に入浴したことはあるかの問いに対しては「ない」が55.6%、「ある」が44.4%となり、約半数の学生は共同温泉に入浴した経験があることがわかった。

ワークショップの実施により不老泉（共同温泉）に興味をもったり親しみを感じたりしたかについての問いに対しては「とてもそう思う」が33.3%、「そう思う」が44.4%、「ややそう思う」が22.2%であった。「あまりそう思わない」と「そう思わない」の回答はなく、学生のほとんどがワークショップをきっかけに共同温泉に親しみを感じていることがわかった。

(3) ワークショップの経験から得られた教員・保育者としての学びについて

以下の1)～5)の項目ごとに回答を求めた。〈学生の声〉は自由記述から一部抜粋したものである。

1) 造形活動を行う道具や材料（準備を含む）環境構成

1) について学びになったかの問いに対しては「とてもそう思う」が66.7%、「そう思う」が27.8%、「ややそう思う」が5.6%であった。「あまりそう思わない」と「そう思わない」の回答はなかった。以下の〈学生の声〉から、事前準備の重要性や、子どもの活動の動線を考えた上での適切な環境整備について、実践から学びとったことがわかった。

〈学生の声〉

- ・道具の配置場所や絵の具の水の量の調節など必要なものを話し合い、環境を整備することで子どもたちは楽しく活動に取り組めることを改めて学ぶことができた。
- ・様々な色の絵の具を使って好きなところに好きなように塗ったり、終わったあとの手足を洗ったりする場面から、道具の置く位置や活動をする位置を考えることで、子どもが活動しやすいかなどを先輩たちと考えてできた。
- ・テープを貼って文字を作るなど準備の段階で、子ども達がどんな造形活動だったら、楽しく遊び、学べるかなどを考えたり、その活動でどんなものが必要か、考えたりする力を付けることができた。
- ・道具を使うだけでなく、手や足などで感覚を味わうこともできるように配慮できた。

2) 子どもとの関わりや子どもの表現

2) について学びになったかの問いに対しては「とてもそう思う」が66.7%、「そう思う」が27.8%、「ややそう思う」が5.6%であった。「あまりそう思わない」と「そう思わない」の回答はなかった。以下の〈学生の声〉から、身体全体を使った子どもの自由で大胆な表現を目の当たりにしていることがわかる。集中して紙に向かう子どもの言動をよく観察する中で、子どもの表現だけでなく、表現することの原点や本質をも感じとった様子が伺えた。また、表現することはコミュニケーションツールにもなることを改めて体感したようである。

〈学生の声〉

- ・子どもたちと実際に関わり「次は何色にする」や「この色作って」「これくらいの色がいい」などたくさんコミュニケーションを取りながら過ごすことができたので、子どもたちが最初に真っ白な紙に色を塗る時、子どもは私たちが思いつかないような発想がたくさんあって、自分が思うように表現していた。汚れながら手形を作ったりして、自然に作らないと出来ない斬新な作品を、楽しみながら作ることを子どもから学ぶことができた。
- ・お手本や見本を準備することから始め、子どもたちが意欲的になる環境作りが大切ということを学べた。
- ・子どもたちも美術に関して興味を持ってくれ、また美術を通して子どもたちとの距離が近くなっていくこともあるということがわかった。

3) 保護者との関わりや子育て支援

3) について学びになったかの問いに対しては「とてもそう思う」が44.4%、「そう思う」が33.3%、「ややそう思う」が11.1%、「あまりそう思わない」が11.1%で「そう思わない」の回答はなかった。保護者との関わりや保護者支援についての学びになったと強く思う学生は1)、2)、4)の問いに比べて少なかった。以下の〈学生の声〉から、保護者とのコミュニケーションにより、子どもがワークショップを楽しみにしていたことを聞くなど、保護者の子どもへの眼差しや言葉掛けから保護者の思いを知り、保護者とともにその子どもにあった援助を模索している様子が伺える。

〈学生の声〉

- ・保護者とのコミュニケーションで子どもが楽しみにしていたと聞き、自分たちも気合いをいれて、子どもたちと楽しく作品を作っているという意欲に繋げることができた。
- ・自分から保護者に話しかけ「〇〇ちゃんはお絵描き好きなんですか」などその子の普段の様子を聞くことができた。
- ・保護者の子どもが塗っている時の、目線や対

応を見た時。

- ・保護者も一緒に参加することができることで保護者ともコミュニケーションを取る場ができていたから情報交換ができると感じた。

4) 研究会メンバーとの関わりや協働

4) について学びになったかの問いに対しては「とてもそう思う」が66.7%、「そう思う」が27.8%、「ややそう思う」が5.6%であった。「あまりそう思わない」と「そう思わない」の回答はなかった。以下の〈学生の声〉から、先輩から後輩へ学年を超えた学び、子どもに楽しんでもらいたいという共通の思いから生まれる一体感、一人では成し得ない達成感ある学びを得たことがわかった。保育・教育現場など、実社会をイメージしながら協力して取り組めたことがわかる。

〈学生の声〉

- ・準備から片付けまで協力して行うことで、成功したときの達成感とやってきて良かったという思いが強くなった。
- ・案を考えたり準備をしたりするなかでメンバーと関わる機会も増え、みんなでいい案を考えるきっかけになっているからそれが社会に出た時に役立つと感じた。
- ・先輩方が進行されている姿や準備されている姿をみて自分たちもこのように動けるようになりたいと思ったし、先輩方の子どもたちとの関わりを見て言葉かけや援助の仕方などを学ぶことができた。

5) ギャラリー（観覧者：保護者以外で不老泉を利用される地域の方や観光客などワークショップを見守ってくださっていた方々）について関わったこと、気づいたこと

学生の声から、不老泉に入浴に来た地域の多くの人から子どもや学生の活動についての質問を受けていたことがわかり、偶然居合わせた地域の方や入浴に来られた方からワークショップに対する興味関心が得られたことがわかる。学生も、自分たちの活動を見て欲しい、知ってほしいという思いから自然に会話が生まれ、ゆる

やかな関係性が築けている。不老泉に面した通りからも、国内外問わず観光客も一時足を止めて観覧している様子が伺えた。

〈学生の声〉

- ・温泉に入りに来た人が「なにをしているの？」と楽しそうに質問してきた。ぜひお時間があれば見ていてくださいと関わることができた。
- ・何のイベントをしているのか見ている人が多かった。興味を持っていたと感じた。
- ・声を沢山かけて頂いて、励ましのお言葉もいただいた。

6. 保護者アンケートの結果と考察

参加した15世帯26名の保護者のうち、16名から回答が得られた。回答者の居住地は「別府市内」が68.8%、「別府市以外の大分県内」が6.3%、「大分県外」25.0%で、回答者の約7割が地域（別府市内）からの参加であった。保護者アンケートの内容とともに、項目ごとに結果と考察を述べる。〈保護者の声〉は自由記述から一部抜粋したものである。

（1）ワークショップへの申し込み動機

今回のワークショップを知ったのは「幼稚園や保育園でチラシをもらって」が56.3%で最も多かった。その他「企画者に聞いて」が18.8%、「アートマンスのプログラム冊子で知った」が12.5%であった。

参加してみたいと思ったきっかけについてはその他の自由記述を含む7項目を挙げ、複数回答形式で回答を求めた。「ダイナミックな絵の具遊びをさせてみたいと思ったから」は回答者の全員が当てはまると答え、家ではなかなかできないダイナミックな遊びが求められていることがわかった。ついで「楽しそうだったから」は回答者の87.5%が選択し、「子どもが絵や工作が好きだから」が68.8%、「子どもが参加したいといったから」が43.8%、「美術造形に関する経験をさせたいと思ったから」が56.3%で、親子で興味があり申し込みをした家

庭が多いことがわかった。その他「幼稚園又は保育園でチラシをもらったから」が12.5%、「その他」には「テレビでこんな風な造形活動を見て、してみたい！と子どもが言っていたので」という回答もあった。

（2）地域文化（共同温泉）への関心

不老泉への来館頻度については「よく来ている」が6.3%、「何度か来たことがある」が31.3%、「一度だけ来たことがある」が25.0%、「初めて来た」が37.5%となった。「初めて来た」という回答者は別府市内からの参加者であり、地域に居住しながら共同温泉（不老泉）を訪れたことがない家庭が少なくないことがわかった。

実際にワークショップで不老泉に来たことについての感想を複数回答形式で問うと62.5%が「温泉に入りたくなった」と回答し、「普段なかなか来ないがワークショップがあるので来た」が37.5%、「不老泉にまた来てみたいと思った」が37.5%、「ワークショップの場所は特に気にしていなかった」が31.3%で「その他」の回答はなかった。

（3）ワークショップに対する評価

1) 保護者としての満足度

今回のワークショップに対する保護者としての満足度は「とても満足」が64.3%、「満足」が35.7%で、「やや満足」「ふつう」「不満足」の回答はなく、保護者の満足度が非常に高い結果となった。具体的に、どのような点でどのように思ったかについての問いには「子どもが楽しそうにしていたから」「（保護者が）そばにいても子ども自身でコミュニティに入っていることに気付けたから」など子どもが楽しむ場面や、保護者として子どもの新しい一面、成長が見られたことについての声があった。「参加人数に対して、もう少し大きな紙の方がもっとのびのびとできたのでは」という意見もあった。

〈保護者の声〉

- ・家ではこんな風に豪快に絵を描くことはでき

ないので、大変貴重な経験でした。是非また企画していただけると嬉しいです！

- ・ 普段大人しい我が子達が自分の思うように色を塗り始めたので、とてもいい経験になりました。そして、親としても、子どもたちは私が側に居なくとも自らコミュニティに入って行ける事に気が付くことが出来ました。
- ・ ダイナミックに絵の具を使えたこと、子どもたちみんなで仕上げることを経験できたこと、普段使わない道具を使用して全身でアートを楽しむことができたので。
- ・ こどもが絵の具だらけになって楽しそうだった。また、学生さんが多く、こどもも嬉しそうだったので。

2) 保護者から見た子どもの満足度

子どもの様子や感想から保護者に子どもの満足度を問うと、「とても満足」が64.3%、「満足」が35.7%で、「やや満足」「ふつう」「不満足」の回答はなく、保護者から見た子どもの満足度も非常に高い結果となった。具体的に、どのような様子からそのように思ったかについての問いには、子どもから楽しかった、また参加したいという声が何度も聞かれたこと、完成した作品をまた見にいきたいと言われたことなどが具体的に挙げられ、そこから子どもの満足度が高いと感じられたようである。

〈保護者の声〉

- ・ 家では見えない集中した表情が見られた。
- ・ 無我夢中で絵を描くことを楽しんでいました。最後は慣れて楽しそうにしていた！
- ・ 時折振り返って私を見る顔がとても笑顔だったのでとても楽しそうでした。
- ・ 楽しかったようです。帰ってからも塗り絵をしたり普段よりお絵描きに熱心でした。
- ・ (学生の) 今日楽しかったかなー？の問いかけにスッと手が挙がったこと。終わった後、別の場所に寄ったあと「さっきの所通ってー、完成したの見たい！」と言っていました。
- ・ また参加したいと何度も言っていた。

3) 保護者から見た学生の対応について

自由記述のみを求めた。学生の対応については概ね好意的であり、人見知りのある子どもや慎重な子どもも学生の丁寧な関わりにより楽しめたという回答があった。学生の子どもへの声掛けの姿に触発されて保護者も声掛けを楽しんだという意見もあった。その他「積極的な学生と消極的な学生がいた」「自己肯定感や主体性を伸ばす接し方を学ばれても良いかと思う」など課題が残る意見もあった。

〈保護者の声〉

- ・ よく声がけをして手伝いをしてくれました。
- ・ みなさん子どもが好きなのがよく伝わりました。とても感じの良い印象でした。
- ・ 丁寧に横についてくれて、慎重な子どもも絵の具と触れ合えた！
- ・ 一緒に楽しんでくれ、ずっと寄り添って居てくれてとても安心して預けられました。
- ・ 最初はもじもじして馴染めなかったのですが、上手に関わってもらっていました。
- ・ 子供達が自由に心が開放できるように声かけをしてくださり、その姿を見て親たちも皆声かけをして楽しんでしまいました。

4) 造形ワークショップに期待すること

保護者が子どもの造形ワークショップに期待することについては、以下の項目に「その他」の項目を加えた複数回答形式で調査した。当てはまる項目として最も多かった回答は「のびのびと描いたり作ったり」で、全員が当てはまると回答した。次に「家ではなかなかできない造形遊び」と「ダイナミックな活動の経験」が87.5%で多かった。「様々な画材や道具の経験」が75.0%、「想像力表現力を育てたい」と「芸術的感性を育てたい」が62.5%、「休日の遊び場として」が43.8%、「思い出づくり」が31.3%、「お友達を作りたい」が6.3%、「その他」には「日常生活にはない開放された空間や色彩を体験できる」という回答があった。このことから、保護者からはのびのびと描いたり作ったりできるダイナミックな造形活動が求められていることがわかった。

今後、企画してほしい内容については、今回のような絵の具を使った活動、粘土やダンボールなどを使った大型工作、身近なものや様々な素材を使った工作、今回のような別府ならではの企画、地域と融合した企画などが挙げられた。また、なかなか自由に芸術に触れる経験が少ないので、同じ企画でも嬉しいとの回答もあった。

7. 成果

ワークショップの実施とアンケートから、子どもの豊かな育ちのための造形表現活動の場を提供するとともに、学生は準備や実施を通して実際に子どもの自由で伸びやかな表現を目の当たりにし、保護者とも関わりながら、実習とは違う形で教員・保育者の実践的な学びの場とすることができたといえる。

活動中の様子や活動後に保護者が拾った子どもの言葉により、子どもにとっても刺激的で楽しい非日常体験として記憶に残ったことがうかがえる。子どもは、すぐそばに寄り添う保護者や学生、会場を通りすぎる地域住民や観光客に見守られながら、開放的な空間で色や形に関わり、自分より大きな紙への描画や着色を楽しんでいた。学生や参加した他の子どもと活動を通して関わりながら、保護者以外との人間関係の広がりを体験することもできた。

また、保護者は造形表現活動を通じた子どもの姿に触れることで子ども理解が深まり、そこに学生も関わることで保護者の子どもや子育てへの思いを知ることができた。浴場に入らずとも不老泉の源泉から汲み出した温かい温泉水に触れることで、子どもや学生に温泉や地域文化への興味関心を向けることもできた。学生、子ども、保護者、地域が、造形活動をきっかけとしてそれぞれの互惠関係が生まれたことは成果であったと考える。

このようにワークショップを行う「場」の意図的な選定により、学生を含めた参加者が共同温泉という地域文化に自然に触れる機会を得ることができ、造形活動を越えた学びの場となっ

た点は評価できると考える。学生にとっては共同温泉という地域文化に深く根ざした場所で行うことで、地域に対する理解を深め、将来の教員・保育者として地域に密着した教育・保育の在り方を学ぶ貴重な機会となったことも強調したい。

さらに、子どもと学生、保護者の関わりだけでなく、不老泉に入浴に訪れた地域住民や観光客が子どもの活動やアートに触れる機会が提供されたことが、文化的な世代間交流の促進に寄与することができたといえるのではないかな。

8. 今後の課題

学生や参加者の対象者数が限られたため、継続的にワークショップを行い、データを重ねながら引き続き調査していきたい。その際、学生や参加の保護者だけでなく、子どもや地域住民、観光客を含めた不老泉利用者へのインタビューも項目に追加して、造形表現活動や美術教育に関しての意識調査をすることも考えられる。

さらに、別府市の共同温泉だけでなく、他地域や他文化における応用、地域文化を活用した学びの場の可能性について、どのような場所が考えられるのかについても探っていきたい。それにより、造形表現活動における子どもと学生の育ちや地域文化の学びのみならず、美術教育の価値を社会に浸透させることについても、ワークショップを含めた社会へのアプローチ方法を探っていきたい。

謝辞

ワークショップに参加しアンケートにご協力くださった皆様、参加を呼びかけてくださった大学系列園の皆様、ワークショップの開催にご賛同くださった不老泉の管理・運営に関わる皆様、ワークショップ開催のためにご協力くださった全ての皆様に心より感謝申し上げます。

引用・参考文献

- 1) 田中美貴「造形研究会活動報告」初等教育—教育と実践—46 27-28, 2024-03
- 2) 別府市役所温泉課「温泉百科」温泉データ <https://www.city.beppu.oita.jp/sangyou/onsen/detail4.html> 別府市役所 (参照2024. 10. 19)
- 3) 中山昭則「地域資源としての共同浴場に関する研究」大分県温泉調査研究会報告(67), 47-57, 2016-08
- 4) 別府市温泉マネジメント計画(令和6年3月)別府市温泉マネジメント計画策定検討委員会, 2024
- 5) 別府市役所混浴温泉世界実行委員会事業 <https://www.city.beppu.oita.jp/gakusyuu/bunkakatudou/konnyoku.html> 別府市役所 (参照2024. 10. 21)
- 6) NPO 法人 BEPPU PROJECT HP <https://www.beppuproject.com/aboutus> (参照2024. 10. 21)
- 7) 田代洋久「地域指向型アートプロジェクトの比較分析と地域活性化効果」北九州市立大学地域戦略研究所紀要(2), 17-38, 2017-03
- 8) 但馬智子「地域型クリエイティブNPOによるプロジェクトの持続性における一考察」文化経済学19(1), 69-83, 2022-03-31